

オンライン通訳と視覚情報

— 通訳とは何か？ —

Remote-interpreting and visual information

高橋 絹子
Kinuko Takahashi

On-line interpreting and visual information

The present study builds on prior research about interpreters working in the COVID-19 (Takahashi 2022). The previous study, conducted with professional interpreters, revealed that most interpreting services were being provided on-line or via remote interpreting service (RIS) as of March 2021 due to COVID-19 countermeasures. It was found that some interpreters felt uncomfortable interpreting in settings where the face of the speaker or the meeting participants could not be displayed onscreen and recognized such a situation as a disadvantage, while other interpreters were happy to interpret facing a blank screen, saying the situation made it easier for the interpreters to focus on speech sounds. Those findings led the present research into the relationship between interpreting and visual information, particularly the sight of a speaker's face. Results suggest that if the interpreter is familiar with the speaker or the topic of the meeting, they may not consider it necessary to see the speaker's face; however, there is considerable variance among individual interpreters as to the necessity of such visual information. Also, the reasons cited for the necessity vary among interpreters, suggesting psychological aspects.

キーワード

Sight of the speaker's face, remote interpreting, visual information, business interpreting

1. 導入

言葉の通じない人と人をつなぐ通訳という職業も、コロナ禍の影響を受け、2020年以降、従来の対面の通訳現場に大きな変化が起きている（高橋，2022）。一番大きな変化は、2020年にコロナ禍により緊急事態宣言が発出され、人と人が接触することに対して自粛を求められていたところから、日本においても急激にオンライン通訳が導入されるようになったことである。2021

年3月の時点では、海外からの渡航客の入国が制限されていたこともあり、通訳現場では、ほぼ100%に近い通訳案件がオンラインによって行われていたとの報告がある(高橋, 2022)。この調査によれば、Zoom や Microsoft Teams などがよく利用されていたとのことである。また(高橋, 2022)の調査項目の1つとして、オンライン通訳をする際のメリットとデメリットについても質問しているが、デメリットとしてスクリーン上で「相手の顔が見えない」ことを挙げたインタビュー参加者が3名ほど存在したのに対し、1名ではあったが逆に見えないことで「音声に集中することができる」という意見もあった。インタビュー調査に加わった回答者全員(n=13)が、通訳時における視覚情報に関して言及していたわけではないため、この点に関しては結果の報告のみにとどめ、その詳細は今後の調査に含めることにした。その後、オンライン通訳が日常化していることもあり、本調査においてこの「相手の顔が見えないこと」と通訳の関係について焦点を当てることとした。通訳者は「相手の顔が見えない」状況の中で通訳をすることをどのように感じているのであろうか。

これを目的として2022年2月から3月にかけて追跡調査を実施した。高橋(2022)と同様に通訳者に対して構造インタビューを行った。一般的には、通訳の訓練を実施する際には、録音した音声教材を利用することが多い(高橋ら, 2021)。筆者は通訳の専門学校で通訳訓練を受けていた際、講師から「通訳という作業はとにかく聞くことであり、しっかり聞き取ることが何より大事である」と言われ、また「聞くことにエネルギーの8割くらいを当て、残りの2割で訳出を行う」とも指導を受けた(pc)。「聞く」ことに主眼が置かれているわけであるが、では「見る」ことはどのように考えるべきなのであろうか。果たして通訳をする際には音声情報のみで十分なのであろうか。それとも音声情報以外にも、「見ること」が重要な役割を果たしているのであろうか。一連の「通訳とは何か」という研究課題を探求する際、今までは主に通訳の利用者から見た「通訳とは何か」という観点で研究を進めてきた。しかし本稿で取り上げるような通訳者側の技術と行為の側面に焦点を当てて研究を行うことで、より一層、「通訳」に対する考察が深まることが予想される。従って、本稿では技術と行為の側面で、具体的には通訳と視覚情報という観点から「通訳とは何か」という課題の考察を深めたい。

2. 先行研究

通訳というのは、「互いに言語が違うために話の通じない人の間に立って、双方のことばを訳して相手方に伝えること」と定義されている(広辞苑)。この行為には場面や方式により違いがあり、以下のように分類されている。

2.1 通訳の種類

通訳の手法は大別すると話者の発話と同時に訳出が行われる同時通訳と話者の発話に続いて

訳出が行われる逐次通訳の2種類が存在する（Pöchhacker, 2004; 平塚, 2013）。遠隔通訳の際も、この双方の手法が取り入れられている。Pöchhacker（2004）によれば、逐次通訳の場合、長い発話を訳出する際には、ノート・テーキングが必要とされこれは classic consecutive¹⁾と言われている。それに対し、二者による対話型の通訳でノート・テーキングを必要としないものは、ショート・コンセクティブと言われている。またサイト・トランスレーションという原稿を見ながら同時に訳出していく手法もある。

また2020年のコロナ禍以降は、従来の対面通訳という手法に、遠隔通訳（remote interpreting、あるいはオンライン通訳）という分類も加わった。この分類はコロナ禍以前にすでに存在し、広義では電話通訳もこの分類に入り、アメリカでは1920年ころからすでに実施されていた（Pöchhacker, 2004）。日本ではコロナ禍以降、急速に発展した通訳の種類である（松下, 2021）。

また通訳はさまざまな分野で利用されており、その場面によっても異なる名称が用いられている。中でもビジネスの分野で企業での会議や商談、研修などの通訳業務を担当するのは、ビジネス通訳で（平塚, 2013）企業において通訳の実施される分野を日系企業では、取締役会、株主総会、企業提携、特許侵害、技術提携、営業譲渡、労使交渉とする一方、外資系では市場調査、外国人投資家、雑誌のインタビュー、記者会見などがあげられている（佐藤, 2004）。またこれまでのインタビュー参加者の主な通訳の分野もビジネスが多い（高橋・木村, 2019）。

ビジネス通訳の場合は、通常は対面で、また対話形式で通訳が行われるという点が特徴である（Takimoto, 2006）。しかもこの場合の対話とは、二者のそれぞれに複数の参加者が含まれていることが多く（Takimoto, 2012）、そのすべての発話の訳出を担うこととなる。この点は、話者が質疑応答の場面を除き、ほぼ一方的に資料や原稿を見ながらスピーチやプレゼンテーションを行う会議通訳と異なる点である（Pöchhacker, 2004）。

2.2 非言語情報

人は純粋に言葉だけを使ってコミュニケーションをしているのではなく、言葉以外のさまざまな側面から情報を読みとろうとするという（橋元, 1997）。また理解の際には、言葉以外のメッセージに頼るという（邑本, 2012）。このような言葉以外のものを「非言語情報」として（橋元, 1997）。末田・福田（2003）は、「非言語情報とは、言語以外の手段によって行われるコミュニケーションであるというナップ&ホール（1997）の定義がコミュニケーション学ではある程度共有されている」としている。

橋元（1997）は非言語的なコミュニケーションを構成するものを、「非言語的な手がかり」とし、この中には、「まなざし」「うなずき」「手ぶり・身ぶり」が含まれるという。さらに「非言語的な手がかり」は「言語的なコミュニケーション」を補完する3つからなると考えられるとしている。それは1) 近接空間学 2) パラ言語 3) 身体動作学である。近接空間学はコミュニケーションする主体の身体距離であり、3) 身体動作学は身体の動作である。この中で、パ

ラ言語は音声情報で、橋元 (1997) は発話のリズムやイントネーションや速度であるとしている。パラ言語に関しては、片岡 (2017) はパラ言語とは、イントネーション、アクセント、プロソディ、流暢性といった特性を含み「何を」ではなく「どのように」発するかに関わる要素であるとしている。また宮崎 (2019) は言葉にニュアンスを加えているもので、声に関わるとする。例えば声色、音質、声の大きさ、話す速さ、抑揚、トーン (調子) などである。

末田・福田 (2003) では非言語情報を音声的なものと音声的でないものに分類している。音声的なものとしては、韻律素性と周辺言語を挙げており「声の音量、高低、抑揚、間」が含まれるとしている。また非音声的なものとして、コミュニケーションの当事者そのものに関わるものと、コミュニケーションの当事者が置かれた物理環境に関わるものがあるとしている。

非言語行動は、すべての口頭によるコミュニケーション状況に影響を及ぼすといいい、非言語メッセージは言語以上に意味生成に影響を与え (宮崎, 2019) 実際のコミュニケーションにおいては占める割合が大きいという。例えば Birdwhistell (1970) によれば、実際には非言語のコミュニケーションが約 65% から 70%、また Applebaum (1974) は非言語が 65%、「メラビアン」によれば顔の表情やジェスチャーなどの非言語が 55% としている。Mehraian (1968) はこれらの非言語として用いられるものは、感情や気分を伝えるものとしてそれぞれの分析を行っている。たとえ非言語によりメッセージ、つまり顔の表情やジェスチャーなどの非言語が 55% としていても、それは liking に関するものであるとしている (メルビアン, 1971)。

その一方で、末田・福田 (2003) によれば、非言語メッセージは言語メッセージを代用したり言語メッセージを補強したりするとされている。非言語情報は、前述のように視覚情報であることもあれば、パラ言語のように音声情報であることもある。音声情報にも非言語情報が含まれているということになる。また代用であったり補強の役割を占めていることもあるということである。

2.3 「努力モデル」

「努力モデル」とは Gile が提唱したモデルで、通訳の際に通訳者が行うことを「努力」と表現しその配分を説明したものである (武田, 2013)。Gile (2009) によれば、同時通訳の際には、その作業はリスニングと分析に要する努力、訳出の産出の努力、そして記憶の努力から成り立つという (Gile, 2009)。さらにこれらの努力の配分を調整する要素 (Coordination Effort) からなるという。これを公式で表すと、同時通訳の場合には、 $SI=L$ (リスニング) + P (産出) + M (記憶) + C (調整) となる (Gile 2009, p. 168)。また逐次通訳の場合には、これにノート・テーキングが加わり以下のようなになる。 $Intepreting=L$ (リスニング) + N (ノート・テーキング) + M (記憶) + C (調整) (Gile 2009, p. 175)。このモデルでは、リスニングの部分にパラ言語 (つまり聞くこと) が、含まれていると推定できるが、「目でみる」視覚情報のための努力は含まれていない。

3. 本研究の問い

高橋（2022）によれば2020年にコロナ禍が始まって以来、通訳現場では通訳の手法が従来の人と人が直接会って対面で実施する手法から、通信手段を利用した遠隔通訳となり、実際に通訳現場で直接、人と会うことなく通訳サービスが提供されるようになったとのことである。2021年3月の時点では、ほぼ100%が遠隔通訳の手法を用いて通訳サービスが提供されているとの報告がある（高橋，2022）。

高橋（2022）では通訳を遠隔で行う際のメリットとデメリットに関する質問も行っているが、その際、メリットとして、「話者の顔が見えないことで音声に集中できる」という意見と「顔が見えないのでやりづらい」という反対の意見が報告された。実際に通訳を行う際に、通信事情などによりカメラをオフにするなどして、話者の顔が見えないこともあるという。さらに今回の調査でも、感染状況が落ち着くにつれ、2022年3月の時点では、ハイブリット型通訳で、日本人側のみ感染対策を講じて集まるが、日本人以外はオンラインで会議などに参加するという方式も出てきているという報告があり、当時は海外からの渡航者の入国制限が行われていたことから、依然として遠隔通訳は存続していた。

まず実際には、遠隔通訳の際に話者の顔が見えないことはよくあることなのであろうか。顔が見えない状況がよくあるとしたら、そのような状況で通訳を行うことを通訳者たちはどのように感じているのであろうか。一般的には、通訳の仕事というのは、翻訳と異なり、耳から音声を「聞いて」聞き取ったことを訳す行為である。しかし、「聞く」こと以外にも、「見る」ことが必要なのであろうか。この状態について「音声に集中することができてよい」と感じる通訳者と「顔が見えないのでやりづらい」という通訳者の意見がある（高橋，2022）ということとは、通訳をする際には、顔を「見る」という行為も必要とされているということなのであろうか。それとも音声情報だけでも十分なのであろうか。通訳者は通訳時には配布資料や事前に準備した資料を見ながら通訳を行うことがあるというが（高橋，2022）、資料以外にも話者の顔を見る必要があるのであろうか。また顔のどこ、あるいは何を見ているのであろうか。

この点を解明するために、通訳者を対象に「顔が見えない状況」での通訳をどのように感じているのか、つまり「音声情報があれば十分である」と感じているのか、「顔が見えないと通訳しづらい」と感じているのかを探り、さらにそのように感じるのは、いかなる背景や理由があるのかということを探求することが、研究課題である。この問いの答を得ることにより、さらに「通訳とは何か」という一連の研究課題に関して、技術と行為の側面から考察を行いたい。またもし視覚情報が重要であるとしたら、訓練の現場でも音声教材のみに頼るのではなく、動画などの視覚教材の導入を検討する必要があるのではないか。

4. 調査

研究の問いの答を得るために、インタビュー調査を実施した。インタビューは構造インタビューの形式で、インタビュー当時の通訳現場での通訳の方式や「顔が見えない状況での通訳依頼があるか否か」を尋ねた後、「顔が見えない状況で通訳を行うことに関してどのように感じるか」を尋ねた。

4.1 インタビューの参加者

インタビューの参加者は、主にビジネスの場面で稼働することが多い11名の現役通訳者である（通訳者Aから通訳者Kまでを回答者IDとする）。このうち、7名は前回の2021年の調査（高橋, 2022）にも参加している。残りの4名の通訳者は今回の調査に初めて参加者として加わった。参加者の募集は、主に通訳者の知り合いからの紹介（雪だるま方式）によるものである。表1は参加者のリストである。

表1 インタビュー参加者の通訳歴と年齢（年代）

回答者ID	通訳歴	年代
通訳者A	15年	50代
通訳者B	17年	60代
通訳者C	26年	50代
通訳者D	18年	40代
通訳者E	10年	60代
通訳者F	18年	50代
通訳者G	22年	50代
通訳者H	27年	50代
通訳者I	18年	60代
通訳者J	16年	60代
通訳者K	31年	50代

4.2 インタビューの手続き

インタビューは、2022年2月23日から3月17日までの期間に、1対1で個別にZoomで実施した。実施に先立ち、参加のための同意書を画面共有し、収集したデータは厳密に管理され、公表の際には個人が特定できないように個人情報保護されること、さらにインタビューのデータの利用は研究目的に限られていること、また途中でインタビューへの参加を中止できることを説明した。その後、同意書は参加者へ郵送し、署名の上、1部を参加者の手元に保管の上、1部は返送を依頼した。

尚、インタビューでは、その他の質問も行っているが、今回は本研究に直接関係のある内容

のみに着目して報告を行う。本研究に直接関連する質問は以下の通りである。

1. クライアントもしくは話者の顔が見えない中で通訳することは、よくありますか（見えないという意味は、あちらがカメラをオフにしている）。
2. 声が聞こえてくれば、別に顔は見えなくてもあまり関係ないと思うか、顔が見えないととてもやりづらいと思うか、どちらでしょうか。

5. インタビューの分析と結果

以下にインタビューの結果を質問に沿って、報告する。

5.1 「顔が見えない状況」での通訳の機会の有無

まず1つめの質問である「クライアントもしくは話者の顔が見えない中で通訳することは、よくありますか」という質問に関する回答では、11名の参加者のうち、6名はカメラオフ（顔が見えないこと）が「よくある、割とよくある、頻繁にある、オンの方が少ない」と答えた（表2を参照）。また11名の参加者のうち、3名は「カメラオフのことは少ない」「オフのこともある」「見えないこともある」と答えていた。ただ通訳者Eからは、カメラはオンになっていてもウェビナーで参加者が多い場合などは、発言者の特定が難しく、また一人の画面が小さいため顔がよく見えないという報告があった。この結果から、通訳者が話者の顔を見ることができずに通訳をする状況が、実際に存在していることがわかる。しかし、残りの2名は「見えていることが多い」「ほぼ100%見えている」と答えており、必ずしも顔が見えない状況ばかりではなく、顔が見える状況で通訳ができることもあることが判明した。

表2 通訳者が通訳をする際の画面の状況

回答者 ID	見えない状況でやることの有無
通訳者 A	比較的頻繁。よくある。
通訳者 B	ビジネス関係の場合よくある。
通訳者 C	割とよくあるって感じ。
通訳者 D	（カメラ）をオンにして喋ってる方が少ない印象。
通訳者 E	カメラはオン オフのことも。
通訳者 F	カメラオフはよくある。
通訳者 G	カメラオフのことは少ない。
通訳者 H	スピーカー以外カメラオフ。
通訳者 I	見える方が多いが見えないこともある。
通訳者 J	見えていることが多い。
通訳者 K	ほぼ100% 見えている。

5.2 通訳者の感じ方

前述のような環境の中で、通訳者はどのように感じて通訳をしているのかということに関する2番目の質問の「声が聞こえてくれば、別に顔は見えなくてもあまり関係ないと思うか、顔が見えないととてもやりづらいと思うか、どちらでしょうか」という質問の回答を報告する。結果は以下の表3のようになった。

それぞれの通訳者の感じ方に関して、「顔が見えないととてもやりづらい」という場合には、表の左側に、その点に関してどのように意見を述べているかを記載し、「顔が見えなくてもあまり関係ない」という場合には、右側にその点に関してどのように意見を述べているか記載した。

表3 通訳ごとの顔の見えない状況で通訳をする際の感じ方

回答者 ID	顔が見えないととてもやりづらい	顔は見えなくてもあまり関係ない
通訳者 A		相手の顔見えなくても大丈夫。
通訳者 B	顔が見えないとやりづらい。	
通訳者 C		声さえはっきり聞こえてれば大丈夫。
通訳者 D	前よりは顔が見えないことに慣れたが、見えるなら見えた方がいい。	
通訳者 E	顔が見えた方がいい。	
通訳者 F	見えた方がいい。	
通訳者 G	(かつてコロナ前の顔の見えない) 電話会議は嫌いだった。	
通訳者 H	すごいやりづらい。	
通訳者 I		音声のはっきり聞こえたりすれば大丈夫。
通訳者 J	映ってないとやりにくい感があります。	
通訳者 K	基本的には顔が見えないとすごくやりづらい。	

これをさらにまとめると表4のように示すことができる。

表4 感じ方の違いによる通訳者 ID

状況の感じ方	該当する回答者 ID
音声情報のみで大丈夫	A C I
見えた方がよい	D E F
見えないとやりづらい	B G H J K

※ (IDは表示スペースの関係でアルファベットのみ)

表4のように回答には「見えた方がよい」という表現の仕方と「見えないとやりづらい」という2種類の表現の仕方があった。またそれぞれそのように感じる理由や背景にも言及してお

り、それをまとめると表5のようになった。

表5 顔が見えない状況で通訳をする際に感じることの背景

その感情の背景	該当する回答者 ID		
音声情報のみで大丈夫	A	C	I
表情やニュアンスがわからない	B	J	
しぐさやジェスチャーが見えない	J	H	
口元を見たい	B	D	
口の形を見たい	E	(I)	

※（IDは表示スペースの関係でアルファベットのみ）

この表に記載のない通訳者Fに関しては特に理由や背景に関する言及はなく、ただ「見えた方がいいかな」に留まっていた。同様に通訳者Gは顔が見えない中での通訳があまりなく、かつてコロナ禍以前の電話会議のことを言及するのみで、この場合も具体的な理由に対しては説明はなかった。通訳者Iに関しては「音声がいかがなり聞こえれば大丈夫」と答えているものの、英語母語話者ではない話者の英語を聞き取る際に、「発音を確認するために口の形を見る」と答えている。「顔が見えないとその確認ができない」と報告している。従ってそれで通訳者Iを括弧内に入れて表示している。

5.3 それぞれの感じ方の理由や背景

5.3.1 「音声情報のみで大丈夫」という回答者

「音声情報のみで大丈夫」と回答している通訳者A、通訳者C、通訳者Iに関してであるが、通訳者Aは遠隔通訳で顔が見えない状況で通訳を行うことに対し、「相手の顔（が）見えなくても大丈夫。思ったより何とかなる」と答えている。その理由として「内容がわかっている。話の行き先も大体わかっている」と答えている。その反面、「初めてのクライアントしかもテクニカルは見ないと（やりづらいかもしれない）」とつけ加えていた。通訳者Cは「顔（が）見えた方がちょっと安心だし、ああこういう感じの人ねとか。でもそれが通訳にプラスになるかどうかというのは、あんまり関係ない」と答えている。さらに「その人の感情とかもやっぱり音声を聞いてれば、怒ってんだか、イライラしてんのかっていうのもわかるので、それにはもちろん表情があると確かに怒ってるなって確認はできるけど、その程度で、なくてもまあまあいけるかなって思います」と答えている。つまり顔で確認しなくても、パラ言語で十分であるということである。ただここで「顔が見えると安心である」とは述べている。通訳者Cは「その人の癖がつかめちゃうと、音声をはっきり聞こえたりすれば大丈夫です」と答えている。実際に目をつぶって神経を集中させて通訳をすることもあるという。通訳者Iの場合、顔が見えるか、見えないかということよりも、音声がきちんと聞こえるか否かという点に焦点が当て

られている。ただし通訳者Iが口の形に言及していることは、前述の通り(5.2)である。通訳者Fは「音声情報のみで大丈夫」と言及はしていないものの「事務的な定例会議とかだったら、顔見えなくてもいいかなって感じですけど、やっぱりセミナーとか、あと講演みたいなのか、初めて入る会議なんかはやっぱり顔(が)見えた方がいいかなって気はします」と答えており、「話の内容にも話者にも馴染みがある場合」は見えなくてもよいということである。

5.3.2 通訳がやりづらい理由に「表情、ニュアンス、しぐさ、ジェスチャーが見えない」という点をあげている回答者

「表情、ニュアンス、しぐさ、ジェスチャーが見えない」と回答している通訳者B、通訳者J、通訳者Hに関してであるが、通訳者Bは「表情とかニュアンスは、顔が見えないとやりづらい」と答えていて、さらに「口元が見えた方が、わかりやすい感じがする」と答えている。通訳者Jは「ジェスチャーですとか表情が、結構、影響する場合があります」と答えていて、遠隔通訳が導入され、ジェスチャーや表情から情報を得ることができなくなって「表情ですとか、仕草というのが助けになってるんだなということ、今実感しています」と答えている。通訳者Hは「仕草とかトーンとかもなんとなく人間って正面から見てなくても、こういう何かこう感じると、というか視野がここまであるので、人間ってこっち見てますけど、ここで動いてるものを必ず察知してるじゃないですか」と答えている。

5.3.3 通訳がやりづらい理由に「口元を見たい、口の形を見たい(のに見られない)」とあげている回答者

「口(くち)」というキーワードに関する言及は、まとめて報告を行う。「口元を見たい、口の形を見たい(のに見られない)」と回答しているのは通訳者B、通訳者D、通訳者E、通訳者Iである。通訳者Bは「表情、ニュアンス、しぐさ、ジェスチャー」に加えて、さらに「口元が見えた方が、わかりやすい感じがする」と答えている。通訳者Dは「口元をすごく見たくて、口元を見た方が、言ってる内容がより理解できるっていう気がするんですよね」と答えている。また通訳者Eも発音がわからないときに、口の形を見たいという。通訳者Iは前述のとおり(5.2)である。

6. 結果と考察

6.1 「顔が見えない状況」における通訳という場面に関して

今回の調査の結果からは、顔が見えない中で通訳サービスを実施することが比較的多いことが判明した。回答者の指摘にもあるように(通訳者F)ネットワークの問題で、話す時以外は、

参加者に対してオフにするよう指示があることもあるという。自宅などから接続している場合など、通信の容量の問題や住居環境の問題があると考えられる（高橋，2022）。しかし通訳者にとっても「顔が見える」ことで安心感を得られるという利点があり、それにより通訳の訳出の質が向上するのであれば、会議を主催する側は少なくとも通訳者に訳してもらった話者が発言する際には、カメラをオンにして顔を出すという配慮が必要であろう。ただし今回の調査は飽くまで通訳者の感じ方の問題であり、安心感という心理的な側面は別としても、訳出に実際に違いがあるか否かは別の調査が必要であり、また何らかの理論的裏付けが求められる点であろう。

6.2 「音声情報のみで大丈夫」という回答者に関して

「音声情報のみで大丈夫」と答えたのは通訳者 A、通訳者 C、通訳者 I の 3 名である。この 3 名は、年齢は 50 代（通訳者 A、通訳者 C）ないし 60 代（通訳者 I）で、通訳歴は 15 年（通訳者 A）、26 年（通訳者 C）、18 年（通訳者 I）で年代と通訳歴を 3 者間、また他の参加者と比較しても、「音声だけで十分」と感じる要因をみつけることはできなかった。

3 者に共通することとしては通訳者 A、通訳者 C、通訳者 I のいずれの場合にも、通訳の内容が「既知の内容」であったり、「馴染みのある内容」である場合は、「音声情報のみで大丈夫」ということである。通訳者 A の場合には、「初めてのクライアントでしかもテクニカル（な内容）でない限り」ということを報告として付け加えているということは、やはり知らない相手の場合、また慣れていないテクニカルな内容を通訳する場合には、「やりづらい」と感じるであろう。通訳者 I も「その人の癖がつかめちゃうと、音声をはっきり聞こえたりすれば大丈夫です」という報告を付け加えている。また通訳者 F も「初めて入る会議なんかはやっぱり顔（が）見えた方がいい」と報告している。つまり相手や通訳する内容に慣れていなかったり、未知の案件や内容であった場合には、やはり顔が見えた方がよいということだと考えられる。高橋（2022）の報告にもあるように、コロナ禍でも通訳の仕事がなくなる理由に「今までのクライアントとの関係性」を挙げていた回答者がいたことから、この 4 名も比較的、慣れたクライアントの馴染みのある内容の仕事が多く、「音声があれば大丈夫」という報告に至ったのではないかと推察できる（4 名とも高橋（2022）の参加者）。

また通訳者 C は「音声を聞いてれば、怒ってんだか、イライラしてんのかっていうのもわかる」と報告しているが、これはパラ言語（片岡，2017）のことを指していると言える。つまり「顔を見る」ことができずに視覚情報を得ることができなくても、通訳者 C はパラ言語のような音声情報があれば、それで十分であると感じていると解釈できる。音声言語にもパラ言語である非言語情報が含まれているので、それだけでも十分である場合も存在する可能性が考えられる。またそれをどこまで感受できるかという問題はあるが、この 3 人の通訳者は「通訳時に音声に依存するタイプ」ということができよう。

6.3 「顔が見えた方がよい」と「顔が見えないととてもやりづらい」という回答者に関して

「顔が見えない状況」で通訳することに関して、「顔が見えた方がよい」という感じ方と「顔が見えないととてもやりづらい」という感じ方の2種類が存在した。先行研究(高橋, 2022)ではデメリットとして「顔が見えないこと」を挙げているのが13名中3名で残りの10名は特に「顔が見えないこと」を取り上げて、デメリットとして報告していない。この点も併せて考慮すると、「顔が見えなければ、仕方がない」が、どちらかと言えば、「顔が見えた方がよい」という、それほど視覚に依存しているのではない通訳者も存在することが確認できる。また「顔が見えないとやりづらい」と回答している通訳者に関しては、「やりづらい」ということと、「通訳ができない」ということは別の問題で、やりづらくてもきちんと訳出はできている可能性もある。いずれにしても、この8名の通訳者はどちらかと言えば、「通訳時に視覚に依存するタイプ」ということができよう。

非言語情報の役割を考えると、「顔が見えないととてもやりづらい」と感じるのは、先行研究で述べたように、コミュニケーションにおいては非言語情報の役割が大きい、顔が見えないと、その情報を得ることができないからということである。ただ通訳現場において、実際に通訳者はどの程度、音声以外の非言語情報を利用しているのだろうか。逐次通訳時においては、先行研究で述べたように、記憶の保持のために一般的には、ノート・テーキングが必要となる(Pöchhacker, 2004)。また同時通訳の場合は、サイト・トランスレーションと言って、事前に原稿が渡されていて、その原稿を見ながら、話者の発話に沿って同時に通訳をすることもある(Pöchhacker, 2004)。果たして話者の発言を聞くという行為と、ノートを取るという行為と、原稿を見ながら訳すという行為を同時に行うという状況下で、どの程度相手の顔や表情、さらに口の動きまで見ることができるのだろうか。

通訳者Iと通訳者Kは話者の顔がほとんど見える状況でも、「見えないとやりづらい」と述べていることを考えても、「見えない」ことに不安を感じていることも考えられる。あるいは経験しなくてもそのように感じていることは一般的に「見えないとやりづらい」と思われているのかもしれない。この場合も実際に見えている時にどの程度、どこを見ているのかは通訳時の観察を行わないと判断は難しい。

「音声だけで十分」という通訳者が「でも顔が見えると安心」と言っていることから考えてもむしろ「安心感」という精神的な要素の方が強い可能性もある。さらに努力モデルを見ても「見る」という行為によるエネルギー配分は、モデルには含まれていないように思われる。もし「見る」ということが必要な行為であるならば、この分配のプロセスに「見る」という行為も加える必要はないか。

7. 結論

本研究では、通訳者が遠隔通訳を行う際に、カメラがオフになっているなどの理由で、「話者の顔が見えない状況で通訳をすることをどのように感じているのか」ということに関して行った調査結果をまとめたものである。これは先行研究で（高橋, 2022）話者の顔が見えない状況で通訳をすることをメリットとしてとらえている通訳者がいる一方で、デメリットとしてとらえている通訳者がいたため、この点に焦点を絞って調査を実施したものである。実際には、画面に話者の顔が映っていない場合も存在するということが判明した。

構造インタビューの結果、顔が映っていない場合、11名中3名は「音声だけでも大丈夫である」と答えているが、これには「内容や話者を知っていたり、馴染みがある場合」という条件が付されていた。残りの3名は「顔が見えた方がよい」と答え、残りの5名は「顔が見えないとやりづらい」と答えている。11人の通訳歴や専門分野や年齢との関連性は、ほぼ見る事ができない。経歴が長くても、「音声が十分に聞こえれば問題ない」と感じているわけでもない。また年代は1名を除き50代と60代なので、年代の差によるものとも考えにくい。通訳分野も類似していて特に大きな違いは見られない。末田・福田（2003）では「非言語コミュニケーションには、それを受け取る側の敏感さに差がある」としているが、この通訳者の感じ方の違いは、通訳行為をどのように行っているかということに対する考察につながるものである。通訳者の中には、「音に頼るタイプの通訳者」と「視覚に頼るタイプの通訳者」が存在する可能性も考えられる。

「顔が見えないとやりづらい」理由に、非言語情報に加えて、「口の形」と「口元を見る」という報告があった。これは顔の何を見ているのかという問いに対する答となっている。「口（くち）」に関する報告は、先行研究の非言語情報の分類の中には見る事ができない項目である。

「音声が聞こえれば十分」という通訳者Cも、「顔（が）見えた方がちょっと安心」と報告しており「顔が見えない」ことに関して感じることは、心理的な側面もある可能性もある。通訳者Bも「もしかしたら、顔が見えないとやりづらいと思っているだけで、実際は顔は見えていないかもしれない」と報告しているように、対面で顔が見える状況で通訳をする際もあまり顔を見えていない可能性も考えられる。非言語情報を得るという側面以外にも、実は「顔が見えること」は実際にはそれほど見ていなくても、見えているだけで「安心感」につながるという可能性もある。

通訳の方式を考慮に入れた場合、ビジネスの会議で複数がディスカッションを行う場合には、短い対話のやり取りが続き、ノート・テキングを必要としないショート・コンセクティブとなる（Pöschhacker, 2004）。その場合には、その発言はどの話者のものかという特定が必要となる。また議論が白熱した場合など、表情などの非言語情報が必要となってくるであろう。その一方で、話者が一方的に原稿を読み上げることも多い会議通訳の場面では、視覚情報はあまり

必要とされていない可能性も考えられる。従って、今後は通訳の方式による違いも考察に加えるべきだと考える。

本研究は飽くまでも通訳者の「印象」の調査である。従って今後は、対面の逐次通訳の際、または同時通訳の際に実際に通訳者はどこを見て通訳をしているのかということを検証したい。さらに次の段階として、顔が見えれば遠隔（オンライン）でも構わないのか、また実際に対面で話者と場面を共有している必要があるのかということも合わせて検証したいと考える。この点に関しては、オンライン授業に関する研究と知見を共有できることもあると予測されるので、その分野での先行研究の調査も必要であると考えられる。

謝辞

ご多忙の中、お時間を割いて本研究のインタビュー調査にご協力いただいた通訳者の方々には心より篤く御礼申し上げます。

注

- 1) 一般的な訳語が存在しない場合は、そのままローマ字表記とした。

参考文献

- 片岡邦好 (2017) マルティモーダルの社会言語学『社会言語学』井上逸兵編 朝倉出版 82-106.
佐藤あずさ (2004) 「日本通訳産業研究」博士論文 早稲田大学
末田清子・福田浩子 (2003) 『コミュニケーション学』松柏社
高橋絹子・木村護郎 (2018) 「どうして英語ができる人が通訳を使うのか? —日英ビジネス通訳の現場から—」『通訳翻訳研究への招待』19号 91-108.
高橋絹子・大井川朋彦・石塚浩之・稲生衣代・内藤稔 (2021) 「日本の大学・大学院における通訳科目の遠隔授業に関する調査報告」『通訳研究』第21号: 141-162.
武田珂代子 (鳥飼玖美子編) (2013) 「努力モデル」『よくわかる翻訳通訳学』ミネルヴァ書房 160-161.
新村出 (1998) 『広辞苑』第5版 岩波書店
橋元良明 (1997) 『コミュニケーション学への招待』大修館書店
平塚ゆかり (鳥飼玖美子編) (2013) 「ビジネス通訳」『よくわかる翻訳通訳学』ミネルヴァ書房 58-59.
松下佳世 (2021) 「コロナ禍における遠隔通訳の実施状況調査」『通訳翻訳研究』第20号 125-146.
宮崎新 (2019) コミュニケーション学理解のための基本表現 『グローバル社会のコミュニケーション学入門』藤巻光浩・宮崎新編 ひつじ書房 2-18.
邑本俊亮 (福田由紀編) (2012) 『心理言語学入門』培風館 24-35.
Applebaum, R., et al. (1974). *The Process of Group Communication*. Science Research Association.
Birdwhistell, R. (1970). *Kinesics and Context*. Univ. of Pennsylvania Press.
Gill, D. (2009). *Basic Concepts and Models for Interpreter and Translator Training*. John

Benjamins.

Mehrabian, A. (1968). Some referents and measures of nonverbal behavior. *Behavior Research Methods & Instrumentation* volume 1. 203-207.

Mehrabian, A. (1971). *Silent Messages*. Wadsworth.

Pöchhacker, F. (2004). *Introducing Interpreting Studies*. London and New York: Routledge.

Takimoto, M. (2006). Interpreters' role perception in business dialogue interpreting situation. *Monashu University Linguistics Papers*. pp. 47-57.

Takimoto, M. (2012). Interpreters' involvement in multi-party interactions: The nature of participation as listener and speaker. *Multilingua* 31. pp. 1-19.

